

6月4日はしまなみ尾道因島が熱いぞ！

目白大学大学院経営学研究科長・教授
ビジネスクリエーター研究会 会長
吉原 敬典

西日本学生トライアスロン選手権尾道因島大会が開催される因島(いんのしま)は、私が生まれ育った故郷です。これからの未来を創造する大学生が故郷因島に集結するとは何と嬉しいことか！

凧(なぎ)という言葉がありますが、因島はおだやかです。皆さんを心より歓迎します。ここ因島は造船の町であり商店街も発展してきました。現在は人口減少で苦しんでいます。しかし、美しい自然がいっぱいです。皆さんの若い力で賑わいのある場を創造していただきたい。切に願います。

青春の情熱を燃やせ！

あなたがこれから生きていく中で、今がまさに一番輝く時です！ここ尾道因島で大いに輝きましょう！最後の最後まであきらめることなく立ち向かってほしいと思います。そして、ゴールまでやり抜きやり切ってほしいと心より期待しています。尾道因島で青春の情熱を燃やしましょう！

応援する人が魅了される大会、そして何よりも競技する皆さん一人ひとりが日頃の練習の成果を思う存分に発揮する大会になることを祈念しています。競技する皆さんと応援する私たちが共に歓喜し合う大会を一緒に創造しましょう！応援する側にいる私は、本大会を「Happy・Happyの大会」と命名したいと思います。

ホスピタリティはおもてなしにあらず！

今、私たちが住み暮らす日本は、ありあわせのものを寄せ集めてやりくりする。また、行き当たりばったりで、とりあえずその場を取り繕うといったブリコラージュ(Bricolage)的な状況の中にあると考えられます。私が専門に研究している「ホスピタリティ」についても同様な状況が見受けられます。

ホスピタリティとよく混同される「おもてなし」ですが、平安時代からある言葉です。その「おもてなし」は、自らの利益のために贈り物をしたりご馳走をしたりする行為としてしだいに認識されるようになりました。東京オリンピック・パラリンピック競技大会を巡る汚職事件については、贈収賄の温床であった「おもてなし」のDNAが顕在化したものであると考えられます。

それに対して、ホスピタリティは競技する皆さん(ゲスト)と応援する私たち(ホスト)が共に同じ時間と同じ空間を共有し創造する概念として捉えることができます。今、話題の大谷翔平選手はまさに「ホスピタリティ」の発想をもって活躍していると言えるでしょう。なぜならば、彼は勝敗にこだわることよりも、むしろ共に野球ができる素晴らしさを共有することに重きを置いているからです。勝者(Winner)がいれば敗者(Loser)がいます。その敗者への尊敬の念があるからこそ、彼は輝いているのだと思います。

最後に

私が本稿で最も言いたいことは以下のことです。過去に何があり、今日何が起るか。その先に未来があります。私たち一人ひとりを変えることができるのは「未来」です。そして「自分」です。皆さんはどのような未来を創造していかれるでしょうか？

私の願いは、一つです。私が生まれ育った因島をもう一度、再生することです。誰もが住みたいと思う居場所にすることです。心の底から、「尾道因島よ！トライアスロンの聖地になれ！」と言いたいのです。私の思いを未来創造する若い皆さんに託します。



※写真は、尾道サポーターの会初代会長の池尻昭爾さん(写真の左側)と一緒に日本学生トライアスロン連合事務局を訪れた際に写したものです。